塾生による塾生のためのピアサポート

―半学半教の実践―

ピアサポートとは「仲間（Peer）同士の支え合い（Support）」のこと。慶應義塾には師弟の分を定めず、先に学んだ者が後で学ぼうとする者を教える「半学半教」の精神が息づいている。そのため一般的には大学が主導するイベントなども、義塾では塾生が主導し、教職員は塾生の活動から学びを得たり必要に応じて助力するという方針であることが多い。今回の特集では、課外活動や学びをサポートする「新歓実行委員会」と「全塾ゼミナール委員会」、さらに塾生として医学部や病院の広報活動を行う医学部の「スチューデントアンバサダー」の活動などを通して、塾生自治と「半学半教」の実践ともいえる塾生のピアサポートについて紹介する。

新歓実行委員会

中島凜太朗君　麻生昌志君

各キャンパスの新歓の運営を担当する新歓実行委員会。日吉キャンパスと湘南藤沢キャンパス（ＳＦＣ）の責任者に、ほぼ制限なしの対面新歓が復活した今年度の新歓への取り組みと活動から得たもの、今年の新入生へのメッセージなどを聞いた。

全塾ゼミナール委員会

三河創太君

文学部、経済学部、法学部、商学部の各ゼミナール委員会を統括する全塾ゼミナール委員会。他学部のゼミを希望する塾生への支援のほか、毎年秋には多彩な業界で活躍する方々を講師に招いた「業界講演会」を開催している。

医学部スチューデントアンバサダー（Keio University School of Medicine Student Ambassador：KSAM）

医学部を代表する塾生によって２０１９年に発足した組織。医学部の要請に応じて対外的な活動や学部の広報に関わる活動を行っている。２０２１年６月には新型コロナワクチンに関する情報提供も行った。

新歓実行委員会（全塾協議会 特別委員会）

全塾協議会 新歓実行委員会
委員長（兼日吉事業部統括）
法学部政治学科２年
中島凜太朗（なかじまりんたろう）君

全塾協議会 新歓実行委員会
副委員長（兼湘南藤沢事業部統括）
環境情報学部２年
麻生昌志（あそうまさし）君

塾生生活のスタートを応援します

日吉・湘南藤沢の両キャンパスでの新入生歓迎行事をとりまとめる新歓実行委員会。ポストコロナの時代、ほぼ制限なしの対面新歓が復活した今年度の実施やそれに込めた思いについて委員の二人に語ってもらいました。

――今年度、３年ぶりにほぼ制限のない対面新歓が再開しました。

中島　はい、昨年も対面新歓は実施していましたが、クラブ・サークルのビラ配り禁止など、まだ多くの制限がありました。昨年も私は新歓実行委員会のお手伝いをしていて、自分なりに「新入生に寄り添った新歓」という問題意識を持つことができたので、今年も頑張りたいと思い委員会に参加したのです。

麻生　私はＳＦＣ（湘南藤沢キャンパス）で所属している湘南学祭実行委員会の先輩から誘われて、中島君と同じく昨年から新歓実行委員会に参加しています。新入生が塾生生活を始めるにあたって役に立ちたいという気持ちが参加動機であり、モチベーションです。今年の新歓期間はＳＦＣでも多くの新入生でにぎわい、鴨池の周囲では塾生がシートを広げて楽しそうに参加していたのが、コロナ禍で大学生活を送ってきた私にとって新鮮な光景でした。

中島　私も日吉キャンパスが新入生とビラを配る各サークルの塾生でにぎわっている様子を見て鳥肌が立つほど感動しました。でも一方で実行委員としては、それだけプレッシャーも大きく、トラブルなく新歓期間が終わったときにまず感じたのは「安堵感」。新入生にとって学生生活を送る上で、最初の一大イベントを無事に終えられたことにホッとしました。

――新歓実行委員会の仕事について教えてください。

中島　新歓実行委員会の使命は、新入生に慶應義塾内の学生団体、クラブ・サークルを知ってもらう、新たなコミュニティを見つける機会を提供すること。例年、冬から活動を開始し４月上旬の対面新歓の実施まで期間限定で活動しています。短期間とはいえ、パンフレットやＷｅｂでの情報提供、クラブ・サークルとの連絡、学生部との調整など業務は膨大にあり、かなり密度が濃い活動といえるでしょう。

麻生　私はＳＦＣの対面新歓の統括やパンフレットの制作のほか、各団体の情報を一覧できる「Circle Square」というＷｅｂサイトをキーワード検索できるように改修しました。

中島　今年再開した各団体のビラ配りに際しては「許可ナンバー」を割り当て、それ以外のビラ配布は禁じました。社会問題にもなっているカルトや悪質商法などの勧誘を締め出すためです。また、新歓期間中に新入生から最も問い合わせが多い、キャンパスや校舎内の情報、各行事のタイムテーブルなどをよりわかりやすくするために試行錯誤しています。

――新歓実行委員会の活動を通してお二人が得たものはなんですか。

中島　私が所属しているもう一つの団体、三田祭実行委員会は三田キャンパスのみでの活動ですが、新歓実行委員会の活動を通してSFCや信濃町キャンパス、芝共立キャンパスの塾生の視点を取り込めたことが大きな収穫です。あらためて総合大学である慶應義塾の規模の大きさを感じることもできました。

麻生　私も同じです。多くのSFC生は湘南藤沢キャンパスで4年間完結してしまいがちなのですが、新歓に携わることで三田キャンパスや日吉キャンパスの知り合いも増えましたし、各キャンパスの個性や特色を肌で感じることができました。

――塾生生活を送る上でのアドバイスをお願いします。

委員会で編集・制作しているオリエンテーションパンフレット

中島　課外活動は、正課では得られない人間的な成長や幅広い人間関係、やりがいを得られることが最大の魅力であると思います。「自分の居場所」になるような団体を見つけてほしいですね。同じジャンルでも団体によってそれぞれカラーがあるので、いくつかの団体の人たちと実際に話してみて、よく考えてから決めるといいと思います。

麻生　中島君が言うように大学生活で「自分の居場所」を持つことは大切だと思います。それも一つに限らず、自分が心を許せる場所をたくさん持っておくといいです。団体選びにはぜひ「Circle Square」を活用してください。もし自分にぴったりのサークルが見つからなければ、仲間を作ってサークルを立ち上げてみてもいいと思います。

義塾における学生自治の意義

日吉学生部　事務員
廣瀬太一（ひろせたいち）

新型コロナウイルス感染対策が緩和された今年の新歓は、ビラ配りなどの勧誘活動が全面的に解禁され、キャンパスは新入生と学生団体で埋め尽くされるほどのにぎわいでした。新歓は受験勉強を終え、晴れて入学した新入生が、あらためてこれからの大学生活に胸を躍らせ、義塾での学生生活をスタートさせる重要なイベントです。そのようなイベントを一足先に入学した先輩が塾生目線で企画から運営までを行うという点に新歓をはじめとする学生自治の意義があると考えています。塾生がより良い慶應義塾を創り上げていく、そのような塾生の自治活動を職員として微力ながらサポートしていきたいと思っています。

全塾ゼミナール委員会

全塾ゼミナール委員会　委員長
法学部法律学科４年
三河創太（みかわそうた）君

ゼミ選択から将来を考えた業界研究まで

三田キャンパスの「全塾ゼミナール委員会」をご存じですか？「いったい何をやっている委員会なの？」そんな疑問に委員長が答えてくれました。

塾生生活の充実に欠かせないゼミナールの選択をサポート

私たち全塾ゼミナール委員会は、三田キャンパスの文学部、経済学部、法学部、商学部の各ゼミナール委員会を統括する上部組織です。私自身、法学部で学び、ゼミナールの選択が塾生生活の充実のためには何より大切だと実感しています。後輩の皆さんにもぜひ自分がやりたいことにマッチしたゼミで学んでいただきたいと考えています。私たちは学部を横断する委員会として、他学部のゼミを希望する塾生に対して情報提供や支援、ルール作りのほか、ゼミ間の交流イベントを開催するなどさまざまな活動を展開。教職員の方々と一緒に三田キャンパスのゼミナールの発展のために力を尽くしています。

実社会の仕事への知見を深める「業界講演会」の開催

委員会の重要な活動が「業界講演会」開催です。１９９７年にスタートしたこの講演会は、いわゆる「企業説明会」ではありません。各業界の方を三田キャンパスに招き、業界の動向や特色について広い視野からレクチャーしていただき、塾生が将来を考えるための機会を提供するイベントです。例年、９月から11月にかけて、塾生へのアンケートをもとに約20の業界をチョイス。塾員を中心に各業界の第一線で活躍されている講師をお招きして、お話を伺うほか、質疑応答やパネルディスカッションの時間も設けて、塾生と各業界の方々との活発なやりとりも展開されます。

コロナ禍が始まってからはリモート開催を余儀なくされましたが、昨年は３年ぶりに対面開催（Ｚｏｏｍ配信もあり）を再開。今年度以降も新しい業界や企業の開拓を進めていくほか、早い段階で業界に関する視野を広げてもらうために日吉キャンパスでの１、２年生向けの「業界講演会」開催も検討しています。また、しばらく開催していなかった各学部学科のゼミ間の親睦行事であるソフトボール大会「全塾杯」の復活も計画しています。ご期待ください！

KSAMのこれまでとこれから

医学部6年 大屋健成（おおやけんせい）君

慶應義塾大学医学部スチューデントアンバサダー（Keio University School of Medicine Student Ambassador：KSAM）は慶應義塾大学医学部を代表する学生によって構成され、医学部の要請に基づき対外的な活動や広報を行っている組織です。医学部には人、環境、研究、技術、教育、キャンパスライフなどをはじめ、多岐にわたる魅力があります。その魅力を全ての方に知ってもらいたい、広めたいという思いで活動を行っています。学生としてキャンパスに通う私たちだからこそ伝えられる医学部の良さがあるのではないか。そう信じてKSAMは国内外からのゲストへの心からのおもてなし、在籍中の学生への情報発信など日々奮闘しています。

2019年に発足し、初期にはStanford Universityや沖縄科学技術大学院大学（OIST）御一行にキャンパスや病院内を案内したり、慶應医学賞受賞者の先生にインタビューしたりするなど、非常に光栄な仕事を任されていました。しかし、それから間もなくCOVID-19の時代に入ります。病院への来賓がいない時期が続き、キャンパスでの活動もあまりできない状態で、自分たちの存在意義が揺らぐこともありました。そんな状況だからこそ、医学生として何かできることはないか模索した結果、今では研修医として活躍されている先輩を中心に「医療系学生の感染予防指針」を作成することができました。当時、未曾有の事態に対して医学生の臨床実習は一時中止されていました。医療現場の安全を守りつつ、実習の再開をするためには、自ら正しい感染予防策を学び、身につけること、そしてそれを示すことが重要だと考え、感染症専門医の監修のもとで感染予防のマニュアルとして作成したのです。KSAMの活動を指導してくださっている門川俊明教授のご尽力もあり、この感染予防指針は、全国の医学生、医学部教職員、看護学部や薬学部、社会福祉学部、研修病院など、幅広い方々に活用していただきました。メールやSNSでも感謝の声をいただいたほか、他大学の友人からも使っているという話を聞きました。この活動は日経メディカルや朝日新聞に取り上げられ、塾長賞もいただくことができました。

さらに、慶應義塾大学がコロナワクチンの職域接種を開始した際には、義塾医学部の執行部の先生方から、学生が不安なくワクチン接種を選択できる方法を考えてほしいと要請がありました。ワクチンにどんなリスクとベネフィットがあるのか、学生一人一人が正確な情報のもとで理解し、考えたうえで接種するかを決めてほしい。その思いから、「新型コロナウイルス大学生向けワクチン情報サイト」をオープンしました。ユニークユーザーは約1万に上り、結果的に慶應義塾大学では当時約8割の学生がワクチンを接種し、その接種率の向上に少しでも貢献できたのではないかと考えています。

医学部の顔として、学生のうちから責任ある立場で活動を行えることは大変貴重なことだと思います。医学に精通している方だけでなく、さまざまな視点や意識、知識を持つ人たちにものを伝える経験は、将来医師として臨床の場に出る際も、患者さんやそのご家族の目線に立って接することにつながってくるのではないかと思っています。今後も、自分たちのできる範囲で、精いっぱい医学部の魅力を発信していけたらと思います。